

夏大豆と秋大豆における青刈収量の比較 (第2報)

加藤 拡*・古谷 義人*

KATO, H. & FURUTANI, Y. Comparison of Green Yield of Summer-type and Autumn-type Soybean as Green Manure (II)

第1報で述べられたような目的にしたがい、九州農試において行つた畑での成績について述べる。

材料及び方法 試験は1955年に行われ、夏大豆は白莢1号及び松浦、秋大豆は操大豆及びアソマサリの4品種を用いた。畦巾2尺とし各品種とも反当5升を4月9日に播種、肥料は反当堆肥150貫、過石3貫、硫酸1貫を基肥とした。収量調査は6月16日、6月23日、6月30日の3回に行つた。試験区の配置は分割試験区法で3区制とした。

成績 まず反当生草収量についてみると第2表の通りで、第1回の調査では夏大豆の2品種と秋大豆の2品種との間に有意差が認められ秋大豆の方がすぐれて

くる。また各品種の各時期における窒素含有率に大差がないので反当窒素生産量も生草収量と同様な傾向を示した。第3回の調査で白莢1号と操大豆の反当窒素生産量が接近しているのは、操大豆が丁度開花期で、窒素含有率の低下する時期に當つていたことにもとづくものと考えられる。

以上のように6月中旬における刈取では夏大豆と秋大豆の間に有意差を認めないのにそれ以後においては有意差を認められるようになるということは、第1表にもみられるように秋大豆はひきつづき栄養生長を続けているのに対し、早生種で6月中旬、中生種で6月下旬にかけて栄養生長の停止期に入ることになる。

第1表 生育調査成績

採取月日	主茎長			主茎節数			分枝数			分枝節数			開花始
	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V	
	cm	cm	cm										月日
白莢1号	46.2	48.6	48.5	11.5	12.3	12.4	2.8	3.6	3.4	6.1	10.4	9.8	6. 8
松浦	50.1	59.1	62.1	10.4	12.0	12.1	2.1	2.6	3.3	3.3	5.6	7.7	6.14
操大豆	50.0	57.5	69.4	9.8	11.7	12.9	0.5	0.9	1.7	0.5	1.4	4.1	6.22
アソマサリ	41.0	49.4	61.3	10.5	12.5	14.1	1.4	2.0	2.3	2.0	4.0	4.4	6.30

第2表 収量調査成績

採取月日	反当生草重			反当風乾重			乾物の窒素含有率			反当窒素生産量		
	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V	16/V	23/V	30/V
	kg	kg	kg	kg	kg	kg	%	%	%	kg	kg	kg
白莢1号	748	846	1094	158	186	260	3.06	2.95	3.11	4.42	5.08	7.46
松浦	795	915	1239	164	185	276	2.72	2.86	2.65	4.13	4.93	6.95
操大豆	905	1199	1493	192	240	314	2.73	2.83	2.53	4.84	6.22	7.48
アソマサリ	810	1117	1506	175	238	311	2.99	2.93	3.01	4.77	6.50	8.71

* 九州農業試験場

因するものであろう。結局夏大豆も 6 月中旬頃までに刈取りするという前提であれば、しいて秋大豆を用いなくとも反当収量という点では秋大豆に劣るとは必ずしもいえないように思われる。

結局第 1, 2 報を総合してみても、刈取時期のいかんによつては必ずしも夏大豆が秋大豆に劣るとはいえないようであり、そのような刈取期はほぼ 6 月上旬か中

旬にかけてのころと推察され、その場合初期生育量の大きい大粒種を用いた方がよいということが指摘できよう。しかし 6 月上中旬における生草収量は 200 貫前後という段階であり、実用性あるいは普及性との立場からみて夏大豆を青刈大豆として用いることは、従前の考えのように、特殊な場合を除きすすめるべきことではないように思われる。